財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

年報

平成
３年度

1992

㈶愛知県埋蔵文化財センター

序

当埋蔵文化財センターは設立以来７年を経過し、活動はこれまで以上に充実したものとなってまいりました。

近年、調査対象となる遺跡は、三河の山間部から名古屋市内の官庁街という大都市の中央部まで県内の広い地域に及び、これにつれて、旧石器時代の打製石器を出土する豊田市伊保遺跡から江戸時代の城郭の遺跡である名古屋城三の丸遺跡まで、遺跡の性格、出土する遺物もさらに多岐にわたるようになってきました。また、今年度当センターが刊行した遺跡の発掘調査報告書はこれまでで最も多く13冊にのぼり、通算41集に達し、内容も濃いものとなっております。この中には、全国的に有名な朝日遺跡の報告書の自然科学編・木器編が含まれ、当遺跡の資料整理も佳境に入ってまいりました。

以上のような活動の記録をこのたび「年報　平成３年度」として取りまとめました。本書が考古学研究はもとより、埋蔵文化財の保護と活用の上でもお役に立つことができれば幸いかと存じます。

さらに、本書の刊行にあたり、専門委員の方々及び愛知県教育委員会の御指導御助言を頂き、また、建設省、日本道路公団、愛知県土木部・衛生部・警察本部、地元市町村、その他の関係の方々に多大な御協力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

平成４年３月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

理事長　高木　鐘三

例　言

1．本書は、財団法人愛知県埋蔵文化財センターの平成３年度事業の概要をまとめたものである。

2．調査は、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局、愛知県土木部・衛生部・警察本部から、愛知県教育委員会を通じての委託を受けて、本センターが実施した。

3．調査の概要は、各遺跡ごとにまとめたものである。

4．普及活動の概要は、本センターの事業のうち、研修会・埋蔵文化財展などの埋蔵文化財の発掘調査以外の事業についてその概要を掲載した。

5．発掘調査にあたっては、理事・専門委員の各氏及び愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導助言をいただいた。

6．本書の作成にあたっては、阿部小百合、河合明美、岡田智子、五藤そのみ、坪井知江子、古橋佳子、八木佳素実各氏の協力を得たほか、関係各機関並びに、地元作業員の方々には多大な援助を賜った。

7．調査区の座標は、国土座標第Ⅶ座標系に準拠する。

8．各調査区の名称はローマ字で表し、昭和63年度までは前にその年の年号による年度を、平成元年度以降は西暦による年度の下２桁を冠する。そのため、平成３年度は92○区となる。

9．文責は各文末に記した。

財団法人　愛知県埋蔵文化財センターの組織

役　員

理事長

高木　鐘三

常務理事

鈴木　正明

理　事

小金　　潔	県教育長
井関弘太郎	中部大学教授
伊藤　秋男	南山大学教授
大参　義一	愛知学院大学教授
坪井　清足	(財)大阪文化財センター理事長
楢崎　彰一	名古屋学院大学教授
稲石　　新	都市教育長協議会会長(蒲郡市教育長)
大溪　紀雄	町村教育長協議会会長(吉良町教育長)
石井　晃一	県土木部長
樋口　康則	県教育委員会社会教育部長
武田　　晋	県清洲貝殻山貝塚資料館館長(清洲町長)
亀井　誠治	県陶磁資料館館長

監　事

磯貝　満洲	県出納事務局次長
倉知　昌視	県教育委員会総務課長

専門委員

考古学	楢崎　彰一	名古屋学院大学教授
文献史学	早川　庄八	名古屋大学教授
地理学	海津　正倫	名古屋大学助教授
建築史学	浅野　　清	愛知工業大学客員教授
動・植物・考古学	渡辺　　誠	名古屋大学教授
形質人類学	池田　次郎	九州国際大学教授
保存科学	江本　義理	東京国立文化財研究所名誉研究員
岩石学	諏訪　兼位	名古屋大学教授
木材組織学	木方　洋二	名古屋大学教授

職　員

事務局長(兼管理課長)　川島　一夫

管理課

主　査	谷　　隆盛	
主　事	伊藤　秀城	後藤　捨成
	村上　寿章	伊藤　晴美

調査課

課　長	加藤　安信	
課長補佐兼主査	森　　勇一	
	山田　　基	
主　査	大橋　正明	鷲見　　豊
	小塚　俊夫	城ヶ谷和広
調査研究員	野本　欽也	遠藤　才文
	小澤　一弘	松原　隆治
	太田　芳弘	都築　暢也
	赤塚　次郎	石黒　立人
	宮腰　健司	酒井　俊彦
	池本　正明	余合　昭彦
	服部　信博	川井　啓介
	小島　廣也	服部　俊之
	鈴木　正貴	蟹江　吉弘
	樋上　　昇	
嘱　託	松田　　訓	岡本　直久
	金子　健一	楯　真美子

目　　次

Ⅰ．平成３年度事業の概要……1
Ⅱ．遺跡調査の概要……7
　調査の理由と工程……8
　遺跡の位置……10
　山中遺跡……12
　西上免遺跡……18
　堀之内花ノ木遺跡……20
　船橋宮裏遺跡……30
　清洲城下町遺跡……32
　外町遺跡……40
　名古屋城三の丸遺跡……44
　松河戸遺跡……48
　室遺跡……50
　岡島遺跡……58
　牛ノ松遺跡……60
　伊保遺跡……62
　三斗目遺跡……64
　跡ノ口遺跡……66
　一色長畑遺跡……67
　不馬入遺跡……68
　高樋遺跡……69
　三本松遺跡……70
　坂口遺跡……71
Ⅲ．清水遺跡発掘調査報告……73
Ⅳ．埋蔵文化財センターの活動……99
　埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会……100
　発掘技術等研修会……101
　資料の貸出・提供……102
　現地説明会……103
　検討会……104
Ⅴ．付篇（受贈図書目録）……105

平成３年度事業の概要

１．はじめに

平成３年度の受託事業は14事業、発掘調査遺跡は18遺跡、調査面積は44,958㎡である。発掘調査面積は、ここ３年間ほど概ね50,000㎡前後を推移し、安定している。まず、今年度に現れた発掘調査をめぐる状況の特徴について、二、三点まとめておきたい。

その第一点は、受託事業及び調査遺跡の変更が異常に多く生じたことである。遺跡数にして３箇所、調査面積14,950㎡が用地未買収などの理由で実施できなくなり、これに替わって７遺跡、調査面積10,080㎡が新たに年度途中で加わってきた。変更面積は、当初面積の30％近くに昇っており、今までにみられなかった非常に変則的な現象でもあったといえる。その最大の理由は、東海北陸自動車道事業関連田所遺跡（一宮市）及び西上免遺跡（一宮市・尾西市）の面積縮小にあった。ここでは試掘調査も実施できず、全体の調査事業量把握という基礎的な作業においても、問題点を残している。このような調査遺跡の年度途中における大幅な変更は、必然的に調査時期と調査研究員の係編成の変更とを引き起こすものであり、ひいてはそれが数字には表れない負担増を招いていることを指摘しておかねばならない。

第二点は、前年度と同様に小規模分散型の傾向が続いていることである。1,000㎡以下の調査が５箇所あるし、また調査遺跡数18箇所はこれまでで最も多い遺跡数であった。小規模調査ではあっても、事前の調整、準備、事後処理などに要する事務量は、規模の大きな調査の場合とさほど変わるところがない点を心得て調査体制を組む必要がある。

第三点目としては、最近の雇用状況を反映し、発掘調査においても人手不足の現象が著しくなってきたことがあげられる。人手不足は、名古屋市のような大都市や東加茂郡などの山間部のみでなく、県下全域でみられ始めた傾向で、このことが地域によっては作業員の高年齢化を招いてもいる。こうしたなかで、名古屋城三の丸遺跡では「三の丸今昔」、西尾市室遺跡では「室遺跡発掘ニュース」、同岡島遺跡では「週間岡島」、豊田市伊保遺跡では「伊保遺跡調査通信」といったパンフレットを作成し、調査成果の速報を通じて作業員との交流を深めたことが、結果的には人離れを防ぐことにもつながっていった。このような試みは、ある意味において「月の輪教室」的とも言えようが、人手不足かつ３Ｋ状況の中で発掘調査を実施していくためには、発掘調査自体が担っている文化事業的役割をより自覚的に捉えて展開していく必要があることを示唆している。

2．発掘調査

さて、本年度の調査成果の概要は時代順に次のようにまとめられる。

縄文時代遺跡としては、矢作川水系の東加茂郡旭町坂口遺跡、豊田市高樋遺跡・三本松遺跡・三斗目遺跡の調査がある。いずれも矢作川の上流域、中でも後三者は小支流仁王川沿いの段丘面に立地している遺跡である。高樋遺跡からは早期の陰陽二種の押型文土器や粕畑式、茅山式土器が少量出土したが、斜面堆積層への流れ込みのようで遺構は捉えられなかった。坂口遺跡では１ｍにも及ぶ厚い遺物包含層中から、早期の茅山、粕畑式、中期の里木式、曽利式、後期の加曽利Ｂ式、晩期の寺津式、元刈谷式などに属する多彩な土器が出土した。ここでも残念ながら住居跡等の遺構は明瞭に検出できなかったが、土器の型式分類から文化の流れはつかめそうである。また、三斗目遺跡からは後期堀之内式期を中心とした集石遺構が発見されている。中央に方形に囲った墓らしい遺構をもつサークル状の遺構もあり、信州、美濃地方との関連が指摘される。

弥生時代遺跡の調査としては、西尾市岡島遺跡、一宮市山中遺跡、稲沢市跡の口遺跡があった。23号バイパス建設に伴う岡島遺跡の調査は３年目最終年度に当たり、今回は集落の南東端を掘り進めたことになる。希薄ながら高蔵式期の土器、１棟の倒壊した竪穴住居が検出され、昨年の調査で発見された集落の端を流れているとみられた自然河道が、弥生時代まで遡らないことも判明した。また、昨年東海地方で初めて前期の方形周溝墓が発見された山中遺跡では、後期山中式期の前方後方形周溝墓が１基検出された。全長13m、後方部の１辺10ｍの小規模な周溝墓で、昭和60年に西春日井郡清洲町廻間遺跡で発見された事例と比べるとまだ定型化が進んでいない。

古墳時代に関する良好な資料は得られなかった。古代ではまず尾張国分寺跡の一部に当たる稲沢市堀之内花ノ木遺跡の調査があげられる。伽藍の南西から南端を画するとみられる幅2.0ｍから2.3m、深さ0.4ｍから0.7m程の溝が検出され、埋土中から創建時の瓦が一括して出土した。これにより尾張国分寺の伽藍規模を推定すると、東西約180m、南北約230ｍほどとなり、従来考えられていた範囲よりも南北方向が相当長い形態となった。尾張国分寺に関しては、続日本紀、日本後紀、文徳実録などに創建後にたびたび洪水にあったり、また火災にあったことが記されている。今回発見された瓦の堆積状況から、伽藍を画する溝は創建当初に築かれたものであり、創建瓦は769年あるいは775年の洪水により流れ込んだものと推察される。この遺跡は資料価値が高いため、県土木側と盛土保存の協議を重ねたのであるが、実現できなかった。

中世の屋敷跡が展開する西尾市室遺跡からは、10世紀前後に築かれたとみられる木樋を伴った導水施設が発見された。標高６ｍの地表面下３ｍ、中世の遺構面下1.5ｍの地点に築

かれていた。これは、発掘調査区の南壁に沿って土層の堆積状況を見るための深掘りトレンチを開けた際に出土したもので、中世の遺構は木樋の廃絶をもたらした洪水堆積による厚いシルト層の上面に築かれていることも判明した。

木樋は、作り替えを含めて合計３基。丸太材を半截しくり抜いた形態で、その内の１基は長さ８ｍ、幅1.2m、内法0.9m、深さ0.3mを計る大形のものである。材質はヒノキとクスノキ。これらは自然河道から杭列を伴った溝により水を導き、一旦プール状の大形土坑内に水溜めしてから、乱杭でゴミなどを除去した後にこの木樋を使用して高所へと導水した施設である。出水側は調査区外であるため、どのような遺構と施設が展開しているのかわからないが、大阪府池島・福万寺遺跡（弥生時代末）の出土例や中世の荘園に設置された例からすると、水田遺構が広がっているものとみられる。少なくともこの種の遺構は本県では初例で、貴重な資料を得ることができた。木製品の保存が今後の課題である。

中世から戦国時代の調査遺跡としては、上記室遺跡、稲沢市舟橋宮裏遺跡、清洲城下町遺跡がある。室遺跡では方形区画の屋敷跡が５軒発見された。時期は12世紀から15世紀。石組で曲物をもつ井戸が確認されたが、建物配置の形態は捉えられなかった。12・13世紀代の灰釉系陶器は渥美窯産で、破片資料ながら龍泉窯製品などの中国陶器が比較的多い点は注目される。また、これまで知立市西中遺跡群や安城市加美遺跡、西尾市志貴野遺跡で発見されている火葬施設が22基検出されている。このような火葬施設の時期、墓地・集落との関係、被葬者の社会的位置などが研究課題となっている。舟橋宮裏遺跡でも中世墓地の一角が検出された。ここでは尾張平野に多い方形の土坑墓が主体で、火葬施設は小形の円形を呈し、少例である。

昭和61年度から始まった五条川改修に伴う清洲城下町遺跡の調査は最終段階に入った。今年度は現在の護岸堤防下が調査対象となったため、盛土で保存されていた江戸期の面を含めて、城下町前・後期の計３面調査となった。江戸期では18世紀に行われた五条川瀬替え以前の資料を少量得ている。また、戦国期では1586年の天正地震を前後して建て替えが行われたとみられる礎石建物群をもつ広大な屋敷跡が検出された。廃棄土坑から、発掘調査では珍しく狛犬も出土している。

近世以降の遺跡調査としては、名古屋城三の丸遺跡、西春日井郡新川町外町遺跡、額田郡幸田町不馬入遺跡があった。名古屋城三の丸遺跡の調査は本センターとしては４地点目であり、特に今回は３万石を拝領していた尾張藩の上級家臣竹腰家他二軒の屋敷地に該当していたこともあって、江戸期を通じた大量の日常雑器類の出土があった。それぞれの屋敷地境が溝から柵列、石垣土塀へと変わっていく姿が捉えられたのも今次調査の成果の一つにあげられる。しかし一方、攪乱もひどくて建物配置、その変遷、井戸・地下室・庭・

ゴミ穴などの関係はうまくつかめていない。

江戸期の整地層の下から、戦国期の見事な薬研堀、竪穴状の建物遺構１基が検出されたことも特筆に値する。これはおそらくは那古野城の遺構の一部に当たるものとみられ、「金城温古録」に現在の二の丸付近にあったとしるされている那古野城がいよいよそのヴェールを脱ぎ始めたといってもいい過ぎではない。そして、過去２箇所で江戸期の整地層の下から検出された同類の大形溝の位置をも合わせて考えてみると、戦国那古野城の形態は単一の方形区画で周りに堀を巡らした単純な形態ではなく、既に複数の郭をもつ複雑な構造をしていたと考えられるようになってきた。

外町遺跡では、美濃街道沿いの町屋に関する陶器類、また不馬入遺跡からは小さな街道沿いの建物遺構が発見されている。

３．整理及び報告書・年報の作成

今年度は、12遺跡の調査報告書作成、２遺跡の資料整理を進めた。年間の報告書作成冊数としてはこれまでで最高である。このため、作成は遅延を重ね、難渋を極めた。

「朝日遺跡」の報告書は、４年計画の第２年目に当たり、自然科学分析編と木製品・骨角製品・金属製品編の２編を作成した。特に、前者では朝日遺跡の古環境復元、年代測定、石器・土器の素材分析、獣骨や貝類などの自然遺体分析など、様々な自然科学的分析法を駆使して遺跡の全体像理解に迫ることができた。そのうちの一つの課題として、稲作をめぐる問題がある。朝日遺跡ではこれまでの調査で水田遺構は発見されていないが、今回、昭和54年度までに行われた県教育委員会の調査によって採取されていた竪穴住居内埋土のプラント・オパールを調べたところ、明らかにイネ科と断定される化石が相当数発見されたのである。このことは周辺に稲作水田が展開していたことを確証付けている。

「清洲城下町遺跡」及び「朝日西遺跡」の２冊の報告書はいずれも清洲城とその城下町に関する貴重な資料を提示している。朝日西遺跡は総構えの内に位置し、まさに城下町遺跡そのものなのであるが、昭和56年の調査当初、城下町遺跡としての認識が全く欠落していたため、発掘調査により戦国期の遺構面が広い面にわたって破壊されてしまったという情けない経緯を背負った遺跡でもある。両者は、近年、研究の進展が著しい戦国期城下町の都市構造と都市民の生活を考える上で参考になるだろう。

「山中遺跡」は弥生前期末の方形周溝墓が発見されて話題を呼んだ遺跡である。遠賀川式系土器と条痕文式系土器との接点、方形周溝墓の東日本への波及についても言及している。「勝川遺跡Ⅲ・Ⅳ」では、既に刊行した「同遺跡Ⅰ・Ⅱ」の成果を踏まえて、弥生期における木製品加工、地方における古代の墨書土器使用法などについて論じている。

「上万場遺跡」「上の平遺跡」は、矢作川及び豊川上流域の縄文時代遺跡を扱っているが、

どちらも遺構・遺物が希薄であるため若干の土器論に留まっている。しかし、前者からは灰釉系陶器類、また後者からは高蔵式期の弥生土器が出土しており、問題を縄文期の土器の動きのみでなく豊川最上流域への農耕文化の波及、あるいは山家三方衆に代表される中世土豪の活動にまで拡大していくことができるように思われる。

「名古屋城三の丸遺跡Ⅲ」と「吉田城遺跡」は、近世名古屋城と吉田城における武家屋敷跡の調査報告書である。ここでは様々な出土遺物の分析から武士階級の生活の実態を明らかにすると共に、もう一つの方法として、遺構に表れた屋敷区画の溝または塀による屋敷割と絵図及び系図に示された拝領者とを対比する方法を駆使して、具体的に入居者そのものを割り出すことを試みている。これを厳密に行っていくと、土坑などのゴミ穴に捨てられた生活廃棄物を使用していた家庭そのものまで割り出していくことができるわけで、今後、江戸時代の武家屋敷の発掘調査を進める場合の興味深い方法になろう。

「年報」作成の中でひとつ残念に感じるのは、今年度は事実報告にのみ終わり、研究論考が１編もなかったことである。次年度に期待したいが、このことは現地調査、報告書作成がきつくて、十分な時間が取れない状況をも反映している。

４．普及・啓発活動、その他

例年通り、県教育委員会との共催による基礎研修会、専門研修会、埋蔵文化財展、埋蔵文化財講演会の開催、埋蔵文化財情報と埋蔵文化財愛知の発行を行った。これらは、定型化した行事・内容であるが、それだけに絶えず見直しを図っていくことが求められる。

西尾市資料館と県埋蔵文化財調査センターを会場として行った埋蔵文化財展の期間中に、今回初めて催し物として古代の塩作り実験を行ってみた。それぞれ200名近くの見学者を得て好評を博したが、一種の仮説実験とはいえ、催し物は確たる学術的、資料的根拠に基づいて実施していく必要があることを反省として得た。このことは、展示会、パンフレットに使用するイラスト類の作成についても言えることである。

また、期間は１週間程度であったが、両会場ともに入場者は1,300名弱とやや少なく、現地説明会に参集される多くの人々に比しやや少ない感がする。この点も今後の課題であろう。

教育委員会の雑誌「教育愛知」特集号に朝日遺跡が取り上げられたことも、普及活動の一つとして挙げてよい。調査担当者自らが遺跡の持つ歴史的価値を分かりやすく記述していくことは大切なことである。　　（加藤安信）